OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高校生における「自分の考えを書くこと」への問題意識
Author(s)	西森, 章子; 三宮, 真智子
Citation	大阪大学教育学年報. 2015, 20, p. 119-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57428
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

高校生における「自分の考えを書くこと」への問題意識

西　森　章　子　　三　宮　真智子

【要旨】

「書くこと」に対して高校生がどのような問題を抱えているのかを明らかにすることを目的として，大阪府下の高校１年生を対象に調査を実施した．調査は,「書くこと」に対する問題意識を探るもの（調査１）と，彼らの「考えを書く能力」の実態を把握するもの（調査２）の２つから構成された．各調査項目に対する記述を分析した結果，（１）「書くこと」に関して高校生は「構成すること」，すなわち,「文章をまとめること」「自分の考えを組み立てて書くこと」を苦手と感じていること，（２）高校生が産出した意見文からは，主張は述べられやすいが, その主張を支える根拠（理由）は示されにくいことが明らかになった．このことから，高校生に意見文を指導する場合，主張を支える根拠を明確にし，根拠を含めて意見文を組み立てる学習活動を取り入れることが必要と考えられる．

1. はじめに

自分の考えを論理的に組み立てる力，組み立てた自分の考えを書く力は，学業にとどまらず，その後の職業的，社会的生活において必要な能力である（Kiuhara et al. 2009 ; 清道 2010など）．では，この「自分の考えを組み立てる力」や「自分の考えを書く力」は，わが国の学校教育で，どのように育てられているのだろうか．平成24年度施行の中学校学習指導要領（国語科）の「書くこと」から，「考え」「考え方」という語句を含む項目を抽出し，要約すると，第１学年には「日常生活の中から課題を決め，自分の考えをまとめること」「自分の考えや気持ちを，根拠を明確にして書くこと」，第２学年では「社会生活の中から課題を決め，自分の考えをまとめること」「書いた文章を互いに読み合い，自分の考えを広げること」，そして第３学年において「書いた文章を互いに読み合い，ものの見方や考え方を深めること」とある．これらより，中学校教育課程では，自分の考えそのものを吟味すること，自分の考えを書く際に根拠を明らかにすること，自分の考えを拡大･深化させるために他者との相互作用を利用すること，に留意した指導の必要性が示されている．

では，「考えを書くこと」に対し，中学校教育課程を修了した高校生がどのような反応を示すかというと，その結果は良好とは言えない．15歳の生徒を対象とするOECD生徒の学習到達度調査（PISA）によると，わが国の生徒は，自分の考えを書くことに消極的であるという実態が指摘されている（有元 2006; 国立教育政策研究所 2007, 2010）．具体的には，2009年調査（読解力）で出題された自由記述形式問題36題のうち，16題が無答率20％以上であったこと，理由を書くことを求める問題への無答率はいずれもOECD平均より高く，24～29％を示していたこと，などが挙げられる．以上より，「考えを書くこと」の重要性やその指導の必要性が認識されているにもかかわらず，わが国の高校生は「考えを書くこと」に問題を抱えていると考えられる．それでは，当該の高校生は何を問題と感じているのだろうか．

本研究では，２つの調査を通して，高校生の「考えを書くこと」への消極的反応の原因とその実態を調べる．まず，調査１では，消極的反応の原因の一つとして，高校生の「書くこと」への問題意識を明らかにする．なお今回，調査対象者が高校１年生であり，小・中学校での作文経験には個人差があると予想されたため，問題意識の対象を「書くこと」全般に広げている．またこれまでのところ，文章表現に対するネガティブな反応の原因を調べることを目的として，大学初年次生の苦手意識を分析した研究（渡辺・島田 2010）はあるものの，その前段階にある高校生の意識に関する研究は十分行われていない．

続く調査２では，「書くこと」から「考えを書くこと」へ焦点を絞り，高校生の「考えを書く」能力の実態を把握する．具体的には，高校生が主張と根拠を組み合わせて文章を産出できるのかどうかを調べる．この点については，「〜（あるトピック）について賛成か，反対か」という問いかけのある課題に対しては，特別な教育的介入がなくても，ほとんどの高校生が根拠を書くことが示されている（清道 2010）．しかしながら，「あなたの考えを述べて下さい」と高校生に求めた場合，主張を述べた者は対象者全員であったのに対し，根拠を述べた者は，対象者のうち６割強であったという報告も存在する（三宮 2007）．これらより，「考えを書く」ことを求められた場合，主張に加え，主張を支える根拠を含めながら組み立てて書く力が高校生に十分備わっているのかどうかは明らかではない．したがって，さまざまな高校生を対象としながら「考えを書く」能力について，実態を調べる必要がある．

2. 調査1

(1) 目的

「書くこと」について，高校生が有している問題意識を明らかにする．

(2) 方法

対象者　大阪府下の公立高等学校（普通科）１年生４クラス159名から欠席者を除いた149名．

調査内容　「書くこと」に対して，困っていること，問題だと感じていることの自由記述を求めた．調査は，通常の国語科の授業内で，担当教師によりクラス単位で実施された．要した時間は，各クラスとも約10分間であった．

(3) 結果と考察

「書くこと」に関して，「困っていること・問題だと感じていること」の自由記述152件についてKJ法による分類を第一筆者が行い，カテゴリー生成した．次に，筆者ら２名に１名を加えた計３名で，カテゴリーの内容と名称について協議した．その後，最終的に決定された「問題意識カテゴリー」に基づいて，筆者ら２名と他１名の合議により自由記述の分類を行った．表１にその結果を示す．

表１に示した通り，全記述のうち，最も高い割合（65.1%）を占めていたものが「構成する」であった．このカテゴリーに該当する記述の内容からは，「自分の意見をまとめられない」「自分の言いたいことをどうやって文章にすればいいかわからない」などがあり，まず「自分の意見」や「自分の言いたいこと」など，自分のアイデアを明確にすること，そして「まとめること」や「文章にする」など，アイデアを書き表すことに難しさを感じていることが示唆された．そこで，調査２では，「自分の考えを書くこと」が求められる意見文課題に対して，高校生が自らの考えを組み立てて文章を産出できるのかどうかを調べる．

表１　「書くこと」に対する問題意識カテゴリーおよび各カテゴリーの記述数

カテゴリー	説明	記述例	記述数（全記述に対する割合）
1 関与する	「書くこと」の機会に関する言及 「書くこと」への意欲・態度に関する言及	手紙を書く機会がない 自分の意志を書くことがない すぐ疲れる そもそも書こうと思わない	10 （6.6%）
2 表記する	文法、品詞、句読点などの表記上の規則に関する言及 漢字の使用や字の書き方に関する言及	主語・述語を伝えることができない 漢字が書けない 字が汚い 同じ言い回しばかりを使ってしまう	35 （23.0%）
3 構成する	書く内容の文章化に関する言及 文章のまとめ方・組み立て方に関する言及	書くことが思いつかない 自分の意見をまとめられない 自分の言いたいことをどうやって文章にすればいいかわからない 途中で文章の主旨がずれてしまう	99 （65.1%）
4 その他	1～3の結果生じる事態に関する言及	時間がかかる 長い文章が書けない	8 （5.3%）
			計152

3. 調査2

(1) 目的

「自分の考えを書くこと」が求められる場合に，高校生はどの程度，根拠（理由）を示した文章を産出するのか，その実態を探る．

(2) 方法

対象者　調査１の高校１年生159名から欠席者を除いた154名．

意見文課題　あるエピソードを踏まえて，書き手の考えを書くことを求める課題を用いた．この課題は，高校生を対象とした意見文作成授業（三宮 2007）で用いられた問題であり，永野（1985，264頁）の例題を現在の日本の事情に合うように改変したもので，課題文の中に「どうすればよいかについて，あなたの考えを述べなさい」という教示が含められている（図１）．この課題の主な特徴は，①主人公はどうすべきか（主張）とそれはなぜか（根拠）の組み立てで考えを書くことができる，②「ある行動をとるべきである（もしくは，とるべきではない）」のいずれの主張も一理あり，いずれを選ぶこともできる，③主張を支える「根拠」について，さまざまなものが考え得る，の３点にある．その他，課題文にあるエピソード内容が平易で，対象者に高度な読解力を求めないという特徴を持つ．以上を踏まえ，どの程度，根拠（理由）を示した文章を高校生が産出するのかを評価するのに適切であると判断されたため，今回利用することとした．

> Ａ君は，14歳の少年で，キャンプに行きたいと思っています．お父さんは，Ａ君が自分でそのためのお金をかせげば行かせてあげる，と約束しました．そこで，Ａ君は新聞配達をして５万円かせぎました．
> ところが，キャンプに行く１週間前になって，お父さんは気持ちを変えました．お父さんの友達が，パソコンをとても安く譲ってくれるといっているのです．でも，お父さんが自由に使えるお金では少し足りないので，お父さんはＡ君に，かせいだお金をわたすように，といいました．
> **Ａ君がどうすればよいか**について，**いろいろな考え方を考慮しながら**，あなたの考えを述べて下さい．

図１　意見文課題（三宮 2007より）

手続き　調査は，通常の国語科の授業で，担当教師によりクラス単位で実施された．実施において，教師が課題を読み上げ，考えを述べることを促した．また，対象者が自発的に根拠を書くかどうかを見るために，敢えて「根拠に基づいて考えを述べよ」とは指示していない．実施には，各クラスとも15〜20分間の時間が割り当てられ，時間内にすべての生徒が文章を書き終えた．

(3) 結果と考察

まず，調査２の目的に対応する次の２つの分類を設けた．

1．主張のみが示されている：「〜すべきだと思います．」というような形で，書き手の主張が明確に示されている．

2．主張と根拠が示されている：「〜すべきだと思います．なぜなら…」などの組み立てで，書き手の主張に加えて，その主張を支える根拠も明確に示されている．

次に，この基準に基づいて，筆者ら２名と他１名の合議を経て，分類を行った．分類結果と各基準に該当する作文の例を表２に示す．

表２　基準に該当する作文件数（全体に占める割合）と作文の例

基　準	件数（割合）	作文の例
1. 主張が示されている	141（91.6）	Ａ君のキャンプの行きたさ具合によるが，Ａ君もそのパソコンを使うのなら少しは渡してもよいと思うが，５万円全額渡すのは駄目だと思う。 あと，Ａ君のお父さんにちゃんと自分との約束を破ったことについてしかるなりしないといけない。 Ａ君は大人に流されず，きちんと自分をもって大人に意見できるようにすればよいと思う。
2. 主張と根拠が示されている	70（45.5）	Ａ君はお父さんに稼いだお金を渡す必要はないと思います。 なぜなら，お父さんはＡ君に自分で稼いだお金でならキャンプに行ってもいいという約束をしているのに，お父さんの勝手な理由でその約束を破るのは人としていけないことだと思うからです。 よって，Ａ君はお父さんに稼いだお金を渡す必要はないと思います。

注）主張が明示されていない作文は全154件中13件あった

表２に示す通り，「Ａ君はどうすればよいか」について主張を書いた高校生は，全体の９割以上であったが，主張を支える根拠を書いた高校生は，全体の半数以下であることが明らかになった．このことから，自分の主張に対し，自発的に根拠を添えながら「自分の考えを書く」力は，高校生において十分に形成されているとは言い難い．

4. 全体的考察とまとめ

高校生における「書くこと」への問題意識を調べること，また産出する意見文の実態から，彼らの「考えを書く」力について考察することが本研究の目的であった．調査１の結果，「書くこと」に関して，高校生は「構成すること」，すなわち，「文章をまとめること」や「自分の考えを組み立てて書くこと」を苦手と感じていることが明らかになった．このような意識の背景には，考えを書く機会が乏しい，書いたものに対してフィードバックを得る機会が乏しいといった経験の少なさがあるのではないかと推察される．

また調査２からは，「あなたの考えを書きなさい」と意見文の産出を求められた場合，主張を書く高校生

は多いが，根拠を明示する高校生は全体の半数以下に留まることが示された．この「主張に比べて根拠を積極的に述べない」という傾向は，三宮（2007）において観察された傾向と類似している．では，その原因は何だろうか．課題の性質，対象者の特性，作文時間の不足という３つの可能性について考察する．まず，本研究で用いた課題（図１）は比較的平易なものであり，特別な読解力や領域固有の知識等を必要としないものである．ゆえに，課題の性質により根拠が書きにくかったと考えることには無理がある．次に対象者であるが，ほとんどすべての生徒が大学に進学する，ごく一般的な普通科高校の生徒であり，特別に学力が低いわけではない．そのため，学力不足のために根拠が書けなかったとは考えにくい．最後に作文時間であるが，たしかに割り当てられたのは15～20分であり，それほど長い時間ではないが，すべての対象者が書き終えたことが確認されたうえで調査が終了されている．よって，これも原因とは考えにくい．以上の可能性が乏しいことから，やはり主たる原因は根拠の書き方についての知識の不足と練習不足ではないかと推察される．

これらの結果から，「書くこと」に対して，今回対象とした高校１年生は「自分の言いたいことや考えを書き表すにはどうすればよいか」という点に難しさを感じており，実際，自分の考えを書く場合，根拠を示すことができない状態にあると言える．このまま学年が進行したとしても，何らかの教育介入がなければ，自然に根拠が書けるようになるとは予想し難い．また，高校生に，ただ書く場を与えるだけでは，意見文を書く能力は自然には身につかないという指摘（清道 2010）や，文章表現は苦手だと自己評価する大学初年次生が多く存在するという報告（渡辺・島田 2010）と照らし合わせると，「書くこと」に対する苦手意識や組み立てて書くことの難しさは，高等学校の教育課程の中で，容易には解消しないものなのだろう．そうであるならば，高等学校の現在の教育課程に加えて，考えを書く，すなわち意見文を書く具体的な方法の教授とトレーニングの機会が必要となる．

高校生を対象とした教育介入としては，これまでに，論理展開に関する知識（たとえば意見文の型など）の指導（清道 2010）や，意見文の構成要素の指導に併せてグループでのディスカッションを取り入れた指導（三宮 2007）があり，指導効果がそれぞれ明らかにされている．しかし同時に，論理展開に関する知識を獲得させても，高校生が意見に対し適切な根拠を述べるレベルには至るわけではないという報告（清道 2010）もあり，そもそも「根拠とは何か」を高校生が十分理解できていないといった可能性がある．適切な根拠に基づく意見文を産出できるよう高校生を導くには，少なくとも，自分の主張を支える根拠，あるいは他者の主張を支える根拠について幅広く考え，それらを明確にする学習機会が必要なのではないかと考えられる．

本研究に対して残された課題を以下に述べる．今回の研究結果の一般化可能性を高めていくためには，調査手法をより精緻化し，調査対象を拡大していく必要がある．特に「書くこと」に対する問題意識は，対象者の学力レベルや，学習経験（小・中学校で受けた「書く」学習の内容），社会経験（自分の意見やその根拠をはっきりと述べる経験の有無）などに左右されると予想できることから，対象となる高校生が属する学力層や経験を考慮しつつ，調査を進めていく必要がある．

【引用文献】

有元秀文　2008 『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革』，明治図書.

Kiuhara,S.A., Graham,S. & Hawken,L.S. 2009 Teaching Writing to High School Students: A National Survey, *Journal of Educational Psychology*, Vol. 101, No. 1, pp.136-160.

国立教育政策研究所　2010 『生きるための知識と技能４　OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2009年調査国際結果報告書』，明石書店.

永野重史編　1985 『道徳性の発達と教育：コールバーグ理論の展開』，新曜社.

三宮真智子　2007 メタ認知を促す「意見文作成授業」の開発，鳴門教育大学高度情報研究教育センター・テクニカルレポート　No.１.

文部科学省　2012 中学校学習指導要領.

清道亜都子　2010 高校生の意見文作成指導における「型」の効果，教育心理学研究第58巻　第３号，361-371頁.

渡辺哲司・島田康行（2010）大学初年次生が文章表現に対してもつ苦手意識の分析，大学教育学会誌第32巻，第１号，108-113頁.

Writing among Japanese High School Students: Awareness and Performance

NISHIMORI Akiko, SANNOMIYA Machiko

This paper reports on preliminary research that aimed to clarify the kinds of problems high school students have with writing. Two surveys were carried out among high school students in the Osaka Prefecture. Survey 1 aimed to explore students' awareness with respect to writing, and Survey 2 aimed to assess their ability to write their opinion. Two points emerged from the analysis of the survey results:

(1) High school students were aware that they were not good at constructing their ideas.
(2) In their persuasive writing, students freely mentioned claims, but seldom mentioned reasons to support their claims.

These results suggest that high school students learning how to write persuasively might benefit from a learning activity that requires them to clarify reasons for their claims, and to express these in well-constructed sentences.